

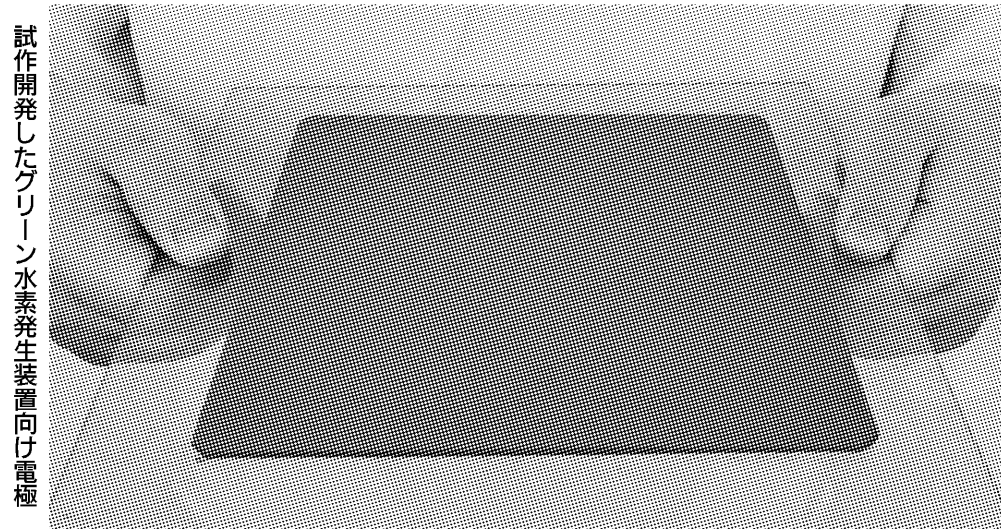
成長につなぐ ― 事例17ゴールズ&169ターゲット

234

富士ダイス

富士ダイスはモノづくりに必要な工具や金型などの超硬耐摩耗工具を手がける。国内の同工具市場で30%以上のシェアを持つ。さらなる持続可能な成長に向けて、変化に対応できる企業体質への転換を目指している。2026年度を最終年度とする3カ年の中期経営計画では、重要施策の一つとして「脱炭素・循環型社会への貢献」を掲げた。今後、次世代エネルギー、次世代自動車、省資源、リサイクルの4分野で製品を積極的に開発し、市場投入していく。

次世代エネ・省資源など4分野に重点



試作開発したグリーン水素発生装置向け電極

開発に生かして、これを掛け合わせた。現在、生産技術開発中で、水の電気分解によるグリーン水素発生装置向け電極として、27年までの製品化を目指している。

省資源分野については、高

熱膨張ガラス成形金型用硬質材料の開発を進めている。産出地が偏在するタングステンやコバルトといったレアメタル（希少金属）を使わず、超硬合金に対し軽量ながら、被加工材となるガラスと同程度の

の高熱膨張係数を持ち、鏡面性を備えた硬質合金をすでに販売。ラインアップ化を検討し、熱膨張係数を制御できる材料の設計・開発に着手した。従来のガラスに対し熱膨張係数の高い赤外線透過レンズや、歩留まり改善を目的に医療分野向けのガラス精密加工製品を成形する用途などで

グリーン水素発生装置向け電極 開発



本格販売している省タングステン・コバルト合金

細かなニーズに添えていく。次世代自動車分野でも、モーターコア用金型向け材種のラインアップの拡充を進め、潜在顧客の獲得を目指している。

一方、リサイクル分野は製品化した工具や金型を回収し、再利用するための資源とするリサイクルの事業化に向けてスキームを検討中だ。脱

炭素・循環型社会の進展に伴う今後の成長分野へのアプローチを目的の一つとして、24年7月に立ち上げた新規事業の専門部署「新事業開発室」が担う。新規事業の確立は100年企業を目指す同社が新たな成長の源泉力として、中期経営計画に重要施策の一つとしても掲げている。サステナビリティ担当役員でもある

技術開発本部長の篠宮護取締役は「少ない資源を有効活用することが国連の持続可能な開発目標（SDGs）の観点に即している」と話す。

同社の工具や金型の材料となる希少金属の産出地には偏在性がみられるため、「国際情勢を含め、事業環境に影響されずに継続的に開発でき、顧客に製品を届けていくことが持続的な成長戦略（篠宮取締役）となる。省エネルギーや省資源といった今の時代に即した最適性能な製品づくりにまい進する。